

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 11号

12月26日(木)

【石川】

星稜高等学校

またこの空の中で

女子高校生でプロライダー選手のアカネ。決勝戦開始直後に嵐に巻き込まれ、喋るカラスに導かれながら不思議な世界を冒険していく。果たしてその先にあるものは……。

ライダーが飛び立つ場面では、吊るした山を模した稜線を下げることで、ライダーが上昇する様子を上手く表現していた。その稜線や裁判所のアーチを吊るすことで、場面転換にメリハリがついていた。また、光る球体が付いている白い布を吊るしたり、スモークを焚いたりすることによって、ファンタジーの独特な世界観を作り上げていた。

照明では、ゴミ捨て山の場面が薄暗くなっていて不気味な雰囲気が出ていたが、役者の表情が見えづらいという意見も出た。ライダーが飛んでいる場面で、コックピットのみを照らすことで上空と地上を分けて表現できていた。音響では、役者が操縦桿を動かすと同時に効果音を流すことで、実際に操縦しているかのように感じられた。アカネの衣装はオレンジで明るい未来を感じさせたが、それとは対照的にリサの衣装はグレーで、すでに亡くなっていることを暗示していた。

幅広い年齢層の登場人物がいたが、どの役も個性的に演じられていて、セリフが無くても動きだけで表現することが出来ていた。陪審員たちが踊っている場面では、裁判長に操られていることは表現できていたが、ダンスをもう少し短くしても良かったのではないかと、という意見も出た。

話し合いの中で、冒険の中に出てくる四つの場所は、人生を表しているのではないかと、という意見が挙がった。ゴミ捨て山の場面では、廃品回収男たちの子供っぽさ、裁判所の場面では、周囲に理解されないことや理不尽な社会を表していた。夢食い人の場面では、生きることに疲れてしまった様子、カコモリの場面では、死ぬことを表していた。これらのことを通して、最終的にはアカネがリサの死を受け入れたことから、この劇のテーマは「再スタート」であると考えた。アカネが最後にゴールするのではなく、スタート地点に戻って来ることもその証であろう。

アカネはリサの死を受け入れ、最後は笑顔で現実世界に戻ってきた。このラストシーンには、姉の夢を引き継ぎ新たなスタートを切ろうとする、アカネの力強い決意を感じた。